

●天平の文化

朝日新聞社編

奈良に遊ぶものは必ず天平を想ふ。天平の文化は世界的多様を含み宏大にして絢爛である。今にして之を顧るに興趣頗る豊なるを覺える。ここに見るところあり大阪朝日新聞社は嚮に天平文化記念會を組織し斯道の大家に請ふて一般と共に天平文化の諸相を聴いた。本書は實にその講演集であり、これによつて更に天平文化宣揚の範圍を擴大せんとするものである。收むるところ十七篇、政治、佛教、藝術、工藝、風俗、建築、國語、萬葉、都城、民衆等誠に天平の文化それ自體の如く多様にして燦然として居る。人は各その好むところに従つてこの天平學の饗宴を樂むことが出来るであらう。(菊判五〇七頁 大阪朝日新聞社發行 價二、〇〇)

●武家時代社會の研究

牧野信之助著

著者廿年の業績を集めたものである。題して武家時代社會の研究といふも固より社會の形態的研究たるに止らず廣き社會生活を對象とする歴史的研究である。従つて法制經濟史上の諸問題、土地制度及聚落問題、時勢及社

會相、教界と名僧の四篇に收められた大小三十三篇は或は武家の族的結合を説き搖籃期に於ける近江商人の狀を明め或は割地の起源を論じ太閤の檢地を究め或は中世末期に於ける村落結合の形態を考へ或は一休宗純の狂態を觀又江東に於ける一絲和尚の姿を描きしなど諸方面に亘つては居るがなほそれらを通じて一貫せる著者の興味と學的態度をみる事が出来る。人も知る如く著者は多年福井滋賀の諸縣史編纂に従ひ地方民間の史料に接する機會多かりしもの、それに基く武家時代の社會的研究は著者の眞摯にして且つ常に全體を見失ふまいとする努力を得て現代日本社會の性質を考へんとする人々に對し寄與するところ最大である。近來出色の論文集として江湖の一讀を薦める所以である。(菊判六三〇頁 東京刀江書院發行 價五、八〇)(以上肥後)

●明治戊辰

文明協會編

本書は御即位大典並に文明協會創立二十周年記念の爲めに出版されたもので、茲に至つた経緯は昨年同會が記念式典を舉行了時、明治史專攻の諸家が多く參會され

たが、閉會後それらの人々が一席に會合した際に端なくも明治初一年史を編纂しやうとの議が起り、即座に重要事件十數題を選び、席に在つた人々に割り當て、咄嗟の間に此の計畫が成立し、こゝに夫れが實現されたのである。本書の特色は明治史專攻の諸家が筆を明治初一年に集注して當時の局面を叙述した事で、之は從來未だ見ない新しい試みである。その主なる目次は

序説 戊辰聯想(平沼淑郎) 總説 明治戊辰と昭和戊辰(三宅雄二郎) 大政奉還に關する考察。王政復古の大局面。鳥羽伏見の戦につきて。(藤井甚太郎) 五箇條の御誓文 附政體書並に官吏公選(尾佐竹猛) 明治元年の官制に就て(藤井甚太郎) 御親征行幸(上野竹次郎) 江戸開城の經過。彰義隊戦争と輪王寺宮。板本武揚の品川海脱走(薄井福治) 御即位禮。改元(上野竹次郎) 東京奠都と御東幸(薄井福治) 奥羽戦争。北越戦争。函館戦争。戊辰戦争の結果と結論(渡邊幾治郎) 和歌にあらはれたる明治維新(中島利一郎)

で、附録として明治戊辰重要日誌。明治元年十二月政體一覽概表が載せてあり、口繪挿繪も多い。(菊版三四七頁 東京文明書院發行 價三圓)

●富士の研究

淺間神社々務所編

富士の靈峯は古來我が國人が深く憧憬し尊崇するところであつて、山麓の淺間神社即ち富士の山神の宮居は此の靈峯と不二一體のものとして國人の信仰を集めてゐる。此度本社が社史を編纂して世に出だす事となつたが、本社と富士山とが不離の關係にあるを以て單に本社の沿革を敘するに止めず、富士山全體を以て研究の對象とし其の地理地質動植物の事より信仰文學美術の方面に及び、以て古來此の靈山が如何に國民の精神生活を豊富にしたかを述べ併せて此の山神が精神界と物質界とに光被した大なる神徳を發揚せんとするのであつて、『富士の研究』と題し、第一富士の歴史(井野邊 茂雄著)、第五富士の地理と地質(石原初六富士の動物富士の植物(岸田久吉、矢部吉禎著)、の三冊を既に刊行し追つて、淺間神社の歴史(宮地直富士の信仰(井野邊 茂雄著)富士の文學、美術、遺跡(高柳光壽、澤田 柴田常惠著)を刊行する由である。思ふに神社の事業として斯く多方面に亘る調査を成した事は他に類例を見ないのであつて、本書の全部が出版せられたならば富士山に關する諸方面の事が可なり明かになり、神祇、地理、藝術はもとより廣く國民思想、

日本文化の由來を研究せんとするものにまつて良い參考書となるであらう。(菊版、1、五〇四頁 價四、二〇、5、四〇六頁、價同上、6、七二四頁 價六、五〇、東京古今書院發行)

●老農渡部斧松翁傳

西岡虎之助著

近時農村問題が頻りに議せられるやうになり、人々が農民の生活、農村の狀態に注意し夫れ等を研究するこゝが次第に多くなつてきたが、其の研究を十分にしやうとするには現在のみならず溯つて過去に於ける夫れ等の狀態を知らなければならぬ。本書は近世に於ける秋田藩の農村開發に偉功のあつた贈從五位渡部斧松翁の傳記であつて、其の關するこゝろ農村及び農民問題の諸方面に亘り、近世の農村の事を知る上に少からず參考となるものである。先づ翁が微賤なる家に生れ常に困苦しながらも絶えず努力して立身を圖つた事より長じて鳥居長根の開墾を企て、あらゆる反對を退け大なる確信を以て之を敢行し、其所に渡部新村を建設した事、天保の飢饉に凶作あるべきこゝを豫知し藩主に獻策して機宜の處置を執ら

しめ其藩並に隣藩を救ふた事、市場を開設して物價の調節を圖つた事、相互扶助、共存共榮を主眼とする村法を制定した事等より更に公人として水利問題救済殖産の諸事業に參劃して顯著なる業績を擧げた事等を述べ、翁が當に秋田藩の老農たるのみならず天下の偉人として推獎に價するものであると結んでゐる。四號活字で通俗を旨としてあるから一般の人々に極めて讀み易い書物である(菊版一〇九頁、東京山喜房發行、價五圓)(以上松野)

●近代 外國關係研究

文學博士 矢野 仁一著

矢野仁一博士が支那近世の政治經濟乃至外交史研究の第一人者なるは今更喋々するまでもない。本書は明清時代に於ける支那と諸外國との外交貿易の變遷を検討せむとする企の第一冊にして、即ちその別名の通りポルトガルを中心させる明清時代の外交貿易の研究である。ポルトガル人のマカオ殖民地開設は當に支那近代史上の重要事件たるのみならず、對日本、對フィリッピン關係を誘致した、然るに東西史料の所傳間々抵牾ありてその眞